四　最も小さい者

マタイによる福音書　二五章三一節―四六節

二〇〇八年十一月二十三日礼拝説教　　秋吉隆雄　牧師

今日与えられました御言葉はマタイによる福音書二五章三一節から四六節までです。この御言葉は大変有名ですから皆さんはよくご承知だと思います。イエス・キリストは受難週の四日目、エルサレム神殿の崩壊を予告し、それに続いて歴史の終わり、終末について語られます。そして「終末に備えて目を覚ましていなさい」と信仰的な目覚めについて語られます。それから終末時の決算について「タラントンのたとえ」と今日の「すべての民族を裁くたとえ」を語られたわけです。十字架の死を決意されたイエス・キリストが弟子たちに「終末の時にはこのような決算がなされる。このことを知って今あなたがたはこのような生き方をしなさい」と力をこめて語られたたとえ、これが今日の御言葉です。

そのたとえはこうです。人の子すなわちイエス・キリストは神の栄光に輝いて天使たちを従えて再び来る。そして栄光の座・裁きの座に着く。この時にすべての国の民は皆その御前に集められます。これは神を知る人、神を知らない人も関わりなく皆、再臨のキリストの前に呼び集められるということです。すると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、人を分けて右と左に置く。羊飼いは羊と山羊をともに育てます。なぜ羊と山羊を一緒に育てるのか。私はトルクメンの羊飼いの生活をしたことのある人の話を聞いたことがあります。その人によりますと羊は近視で直線的に真っすぐに進むことができずに、同じ所をぐるぐる回って先に進めないというのです。一方山羊は真っすぐに進むそうです。ですから、群れを移動させる場合、山羊を先頭に置いて、その山羊のお腹に頭を突っ込むように羊が次々と群がる。そこで山羊を進めると三角形になっている羊の群れをスムーズに移動させることができるということでした。イスラエルの羊飼いがそのようなかたちで山羊を利用したかどうか分かりませんが、興味深い話として印象に残りました。イスラエルの羊飼いは羊を中心に飼うのですが、山羊も一緒に飼っていて、夜になると羊と山羊を分けて休ませるそうです。それは山羊は夜には暖かさを求める。一方の羊は新鮮な空気を求めるからだそうです。

イエス・キリストは「羊飼いがするように羊と山羊を左右に分ける」と言って

います。そこで王様は言います。栄光の座に着かれた人の子イエス・キリストは王となっています。これはマタイ的なのでしょう。マタイでは、イエス・キリストがお生まれになった時に、占星術の博士達は「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおられますか」と問うています。イエス・キリストがローマの総督ピラトから尋問された時にも、ピラトはイエス・キリストに対して「お前はユダヤ人の王なのか」と問うています。イエス・キリストは王なのです。けれどもこの王は地上の権力ある王ではなくて、ロバの子に乗ってエルサレムに入場した柔和な王、そして、自らの命を人の救いのために捧げる王、これがイエス・キリストに現された王の姿です。その王が右側にいる人々、羊に向かって言います。

「さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。」右に分けられた人は、天地創造の時からすでに用意されている国を受け継ぎなさいと言われています。そうすると彼らは生まれるずっと前からすでに神の祝福に与る者とされていたということです。これは、右に分けられた者の祝福の大きさを表した言葉でありましょう。彼らに対してイエス・キリストはこう言います。「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。」この「旅をしていたときに宿を貸し」という言葉は、岩波訳聖書は、「わたしがよそ者であったときわたしを歓待し」と訳しています。旅をしていたのはよそ者なのです。よそ者というのはヘブライ書で「地上ではよそ者であり、仮住まいの者」とありますように、他国の寄留者のことです。今日の日本で言うならば、在日の外国人です。そのよそ者を歓待する。不安で不確かで、寄る辺なき者を喜んで迎え入れる。それを「旅をしていたときに宿を貸し」という言葉で表しています。さらに、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからである。「牢にいる」ということは、犯罪を犯したということでしょうけれども、聖書には、社会的犯罪とは全く関係なくて、信じる信仰内容が許せないということで牢に入れられるケースが沢山記されています。ご承知のようにパウロはしばしば牢で同信の人々からの訪問を受けて喜んでいるという言葉を書き残しています

栄光の座、裁きの座に座るイエス・キリストは、右にいる者たちに、創造の時から用意されていた大いなる祝福を語るわけです。その理由は「わたしが困窮していたときに助けてくれたからだ」と言うのです。すると右にいた正しい人々は、

王イエス・キリストにこう答えます。「主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。わたしはあなた、イエス・キリストにそのような親切をした記憶は全くありません」と答えるのです。王イエス・キリストは答えます。「はっきり言っておく・アーメンレゴー」。これは特に大切なことを言うときに語る慣用的な言葉です。「アーメンレゴー、わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのはわたしにしてくれたことなのである。困窮して行きづまっていたあの最も小さい者は、わたしイエス・キリスト自身である。そのわたしに大いなる親切をして助けてくれた、慰め励ましてくれた」と語るのです。

昨年のクリスマスに婦人会の方々が「靴屋のマルチン」というペープサートを熱演してくれました。あの「靴屋のマルチン」はトルストイが今日のこの聖書の箇所から生み出した美しい童話ですね。「靴屋のマルチン」は、イエス・キリストから「明日のクリスマスにあなたの所を訪ねる」と声をかけられます。喜んだマルチンは、イエス・キリストを迎え入れる準備をします。クリスマスの当日、マルチンが出会ったのは、寒さに凍えた雪かき人夫、乳飲み子を抱えた貧しい母親、そして果物屋の店先からリンゴを盗んだ飢えた少年でありました。彼らにマルチンはできる限りの親切をします。夜、マルチンは「待っていたイエス・キリストは来なかった」と落胆していると、イエス・キリストは「今日わたしはあなたの所に行った」と言われます。「あの雪かき人夫、貧しい母親、そしてリンゴを盗んだ少年、あれはわたしだ」と聞かされるわけです。最も小さい者の一人、それがイエス・キリストご自身である。彼らに対する親切は即イエス・キリストに対する親切そのものである。吉田登さんは、マタイ福音書一八章一四節の言葉、「これらの小さな者が一人でも滅びることはあなたがたの天の父の御心ではない」という御言葉に押し出されて、タイ・エイズ孤児の支援・養育に人生の後半を捧げたわけです。献身的なすばらしい働きをしていることは皆さんもニュースレターでご存知だと思います。

イエス・キリストは山上の説教の中で、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない」、「わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである」と語っておられます。天の父の御心、それは小さな者が一人も滅びることがない。

最も小さい者を支え生かす。これが神さまの御心、これを行う者が天国に入る、とつながってくるわけです。話としてはよく分かるわけで、そうであろうと納得できます。けれども、気になることがあります。それは終末時、天国に迎えられるのは、最も小さい者に何をしたかによって決められてしまうのかということです。これはパウロの説く信仰とは明らかに違うからです。パウロは律法の行い、何をしたか、しなかったかではなく、イエス・キリストを信じる信仰によって義とされる、神によって是認されると語っています。これは「信仰義認」という言葉です。この信仰義認は教会にとって動かすことのできない信仰の核心です。福音そのものです。確かにパウロもロマ書の中で、「神はおのおのの行いに従ってお報いになります」と書いています。また、「愛の実践を伴う信仰」と言っていますし、「律法全体は『隣人を自分のように愛しなさい』という一句によって全うされるからです」とも書いています。われわれの生き方が重要な意味を持っていると書いているのですけれども、パウロの信仰の核心は、ロマ書三章二八節、「なぜなら、わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく信仰によると考えるからです」、またガラテヤ書では、「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは律法の実行ではなくキリストへの信仰によって義としていただくためでした」と書いています。人は律法の行い、良い行いをすることではなくて、信仰によって神によしとされる。これが福音の核心です。

このパウロの信仰理解と今日の御言葉、「最も小さい者への親切」という行いを強調する御言葉は矛盾するわけです。これはどういう関係にあるのか。右にいる人はイエス・キリストからおほめをいただいた時に、「主よ、いつわたしたちはあなたにそのようなことをしましたか」と言っています。これは、最も小さい者に対する親切がイエス・キリストに対するものであることを知らなかったと言っているわけです。彼らはイエス・キリストとは知らずに、最も小さい者に親切をつくしたのです。そのことが御国に入る条件になっています。後半の四一節から四六節までをご覧下さい。

「それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渇いたときに飲ませず、旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、訪ねて

くれなかったからだ。』すると、彼らも答える。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えたり、渇いたり、旅をしたり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言っておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。』こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである。」

私はこの後半の箇所があまり好きではありません。王であるイエス・キリストは左にいる山羊に対して、「呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ」と言うのですね。永遠の罰を受ける左の山羊は地獄行きですね。右の羊は、「天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい」と言われています。右と左は、まさに天国と地獄の差であります。この差は最も小さい者の一人にしなかった、わたしにしてくれなかった、そのことに起因するとこの聖書は断言しているわけですね。わたしたちはこの言葉を前にすると、「わたしは最も小さい者の一人に親切をした」と言える人はいないのではないでしょうか。わたしたちはいかに助けを求める人、助けを求めることさえ出来ない人を無視して反対側を素知らぬ顔をして通り過ぎて行ってしまったか。わたしたちはほぼ間違いなく左側の山羊の群れに置かれるでありましょう。イエス・キリストは「右と左、輝かしい祝宴に与る者と永遠の火に呪われる者とを厳しく分離する」と語っておられます。

しかし、神さまは愛である。善人にも悪人にも太陽の恵みと雨の恵みを同じように与えてくださる。そう伝えています。ところが、ここでは悪人には立ち直れない罰がくだると言っているわけです。これはどういうことでしょうか。わたしはこの二元論は当時の説話にいつも用いられていた形であって、イエス・キリストはその説話の方法を受け入れて話されたのだと思っています。イエス・キリストの真意は、左側、恐ろしい山羊の側に置かれた者にならないで、右側、祝福された羊の側に置かれた者になりなさいという教育的なたとえとして、この二元論を語られたと理解しています。ある方は自分は右でも左でもなく真ん中からひょこっとイエス様のひざに飛び乗るのだと言っていました。わたしは右に行けると信じています。もし左に置かれた人がいるのなら、皆で右に座るようにイエス様に訴える。また、皆で力ずくでも右に引っ張り込む。それが出来るとわたしは思っております。左側の悲惨と恐怖ではなくて、右側の喜びと楽観が信仰であると

信じるからです。

最後に、わたしたちにとって大きな問題、最も小さい者への親切な行為が天国に入る時の条件になるのか。何故そうなのかという問であります。わたしは、こんなことを考えさせられます。動物は強いものが勝ち残ってゆきます。メスは強いオスを求めるといいます。強い子孫を残す本能がそうさせるわけです。そのように動物は常に弱肉強食であります。強いものが生き延びて、弱いものは滅んでいくのです。これは自然の法則で、その弱肉強食の世界の中で動物が生存してゆくわけです。植物もそうでありましょう。条件の良い所で植えられた植物は繁茂しますけれども、そうでないものは枯れてゆくわけです。ところが人間だけが弱い者への愛と同情を示すのです。聖書の文化はまさにそうなのです。神さまはイスラエルを選びました。それはイスラエルが強く大きな民族であったからではなく、逆に弱く小さい民族であったから神はイスラエル民族を選んだと書いています。そして、出エジプト、これも貧しく、苦しみ喘ぐ、弱い民族を顧みてくださった。そこに脱出というすばらしい奇跡が起こったわけです。聖書は重層でありますから、一本道ではありません。たくましいことを喜び、強いことを誇る文化というものが当然あるわけです。しかし、常に小さい者、弱い者、貧しい者への同情と愛にあふれています。これは聖書のいたるところで読むことができると思います。そして、イエス・キリストの生涯は、この最も小さい者を求めることにすべてを費やしておられるのです。「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。……わたしが来たのは正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」イエス・キリストは、失われた羊、なくなった銀貨、そして罪にまみれた放蕩息子を探し出す神を示しておられます。この最も小さい者を捜し求めるのは人間だけなのですね。そして、小さい者を探し求めることを通して、人間である意味と価値が見出されるというのです。失われた人間を探し出し、それに対して無限の愛を注ぐ、そのことにおいて、わたしたちは神さまに造られた神のみ姿になってゆく、そのような文化が聖書の文化なのです。今の時代、弱い者を痛めつける巨大な暴力、あるいは目に見えないいじめの状況というものがわたしたちの周りに沢山繰り広げられています。人間性を失った姿でしかないのではないか。人間が人間であるためには、小さい者、弱い者、貧しい者を支えて生かす、そのことにおいて初めて人間となりうる。少なくとも聖書の信仰や文化はそのように理解することができると思うのです。これは最も小さい者の中に神を見るという

ことで、それが聖書の説く信仰です。マタイによる福音書は、「最も小さい者の一人にしたのは、わたしイエス・キリストにしたのだ」と書いています。あなたがたは、力を驕って弱い者を痛めつける、非人間性から救われなさい。神さまのみ心に従う人間になりなさい。本当に神が共にいる喜びの世界に生きなさい。そのような諭しを今日のたとえはわたしたちに伝えています。わたしは今日のたとえをそのように受けとめてゆきたいと思っています。